コロナ禍における孤独感と対人接触行動に関する一考察

A Study of Interpersonal Contact Behavior during the COVID-19 Pandemic

関　谷　美　希*
Miki　SEKIYA

要　約　コロナ禍において他者との交流が制限されたこと受け，人々の孤独感は高まっていることが推察される。孤独感の解消として対人接触を試みる際に，メールや電話等を利用し間接的に交流を図る群と，繁華街等に外出したり対面で知り合いに会いに行くといった直接的な交流を図る群に行動特徴が分類されると仮定した。仮説 1「交流のための行動特徴として，間接的あるいは直接的な対人接触行動が生じる」，仮説 2「孤独感の低い者は統制のとれた間接的行動をとり，孤独感の高い者は統制がとれていない直接的行動をとる」について検討し，因子分析及び相関係数，回帰係数の算出を行った。結果として，仮説 1 は支持され，仮説 2 は支持されなかった。孤独感の程度ではなく，アタッチメントスタイルが行動特徴に関連しており，孤独感の高い者も統制のとれた間接的行動を行い，その後直接的行動へと移行していることが考察された。

キーワード：孤独感，　対人接触行動，　アタッチメントスタイル

Abstract　People’s sense of loneliness has presumably increased due to the restrictions on interaction with others as a result of the COVID-19 pandemic. We hypothesize that when people attempt to make personal contact as a means of relieving loneliness, they will be divided into two groups: those who interact indirectly via e-mail, telephone, etc., and those who interact directly by going downtown or meeting acquaintances face-to-face. Hypothesis 1: "Indirect or direct interpersonal contact behaviors occur as behavioral characteristics for interaction" and Hypothesis 2: "Individuals with less loneliness engage in controlled indirect behaviors while those with more loneliness engage in uncontrolled direct behaviors." These hypotheses were examined, a factor analysis was performed, and correlation and regression coefficients were calculated. Results substantiated Hypothesis 1 but not Hypothesis 2. Rather than one’s degree of loneliness, one’s attachment style is related to behavioral characteristics, and people with more loneliness also engage in controlled indirect behaviors and then transition to direct behaviors.

Key words：Loneliness, Interpersonal contact behaviors, Attachment style

はじめに

2020 年の新型コロナウイルスの急激な感染拡大に伴い，我々の生活には様々な変化が生じている。感染症対策としてアルコール消毒の徹底やマスクの着用が日常化し，密閉，密室，密接の「３つの密」を避けることや食事の際に会話をしない「黙食」が推奨される中，特に不要不急の外出を控え他者との接触を避けるための「外出自粛要請」や飛沫感染防止対策から他者と一定の距離をとる「ソーシャルディスタンス」といった政策によって，他者と対面する行動は大きく制限されている。様々なストレスが生じる危機的状況下で他者と接触することが難しくなった今日，とりわけ「孤独感」を抱く者は多いと考えられる。そこで本研究においては，他者との接触が制限されるコロナ禍での孤独感に注目し，人々が孤独をどのように感じ，捉え，また行動して

*　人間生活学研究科人間発達学専攻
Division of Human Development, Graduate School of Human Life Sciences

いるのかに焦点を当てる。これにより，「他者との直接的な交流，接触の制限」という新たな日常において見られる特徴的な対人行動を精査するとともに，今後のコロナ禍での生活様式や孤独に対する援助のあり方について，学術的な知見を得ることを目的とする。

1 問題と目的

1-1 孤独感

Peplau＆Perlman(1979)によると，孤独感は「個々の持っている社会的関係が当人が望むものよりも小さかったり，満足できないものであった際に生起する不快な感情」と定義されている。社会的相互作用における願望レベルと達成レベルの間の食い違いから起こる概念として，Peplau らが作成した UCLA 孤独感尺度は，上記の様な孤独感を測定するうえで広く用いられている指標のひとつであり，精神的健康や自己への意識，対人的行動との関連などが示されてきた。特に自己への意識においては，Peplau らにより自尊感情との関連が検討されており，孤独感の高いものほど自尊感情が低いという知見が示唆されている。また，Weiss(1973)は孤独感を愛着の欠如などから生じる「情緒的な孤立」と集団や仲間との関係性の欠如などから生じる「社会的な孤立」の二側面に分類しており，Peplau ら(1979)が検討した孤独感は後者に当てはまるとされる。

新型コロナウイルスの影響により一変した生活の中で人々が抱えるストレスはさまざまであるが，特に他者との社会的関係や所属する集団，仲間との直接的な繋がりが絶たれたことでコロナ禍以前には経験することのなかった「社会的な孤立」に直面した者は少なくないと考える。また，家族や友人，恋人など特定の親密な他者との接触も制限されるなか，孤独感は「社会的な孤立」のみに留まらず「情緒的な孤立」としての側面も含んでいる可能性がある。他者との接触が制限され不要不急の外出の自粛が求められる今日，人々を取り巻く孤独感に焦点を当てその行動の特徴や心理的側面の問題を捉えることは，未だ終息の糸口が見えないコロナ禍において「新しい生活様式」の一助を担う知見に繋がると推測する。以上により，本研究においてはコロナ禍で変化した生活を前提に孤独感を多次元的に捉え，社会的孤立及び情緒的な孤立の両側面から検討する。

1-2 行動の特徴

孤独感の高い者がとる行動の特徴について，Solano, Batten, ＆Parish(1982)は大学生を対象とした実験研究のなかで孤独感高群が他者との親密性の程度にマッチしていない自己開示行動を行っていた点を指摘している。Jonnes,W.H（1988）や相川・佐藤正・佐藤容・高山ら（1993）はこうした孤独感高群の対人的行動の特徴を「社会的スキルの問題及び不適切な対人スキルの使用による問題」として検討しており，「孤独感の高い人は，対人場面において相手から正の強化を受けるような行動や罰を受けないような行動，お互いの利益になるような行動がとれていない」といった指摘がなされている。さらに，孤独に陥った際の対処方略として，男子は友だちとの接触を高め，女子は友だちへの自己開示や家族との交流を高めることが諸井（1989）によって提示されている。

コロナ禍においては，先述した通り，人混み等の他者と密接に関わる場所への外出自粛要請や，直接的な対人接触の制限などが政策の一環として推奨されてきた。他者との交流や接触を求めることは孤独感への対処方略として妥当であるが，こうした新たな社会的制約のなかで積極的に外出し対面での交流を図ることは場にそぐわない不適切な対人スキルとなる可能性がある。先行研究の結果から，こうした行動をとる者は孤独感が高い傾向にあると仮定できる。また上記のような直接的な対人接触と比較して，間接的に他者との交流を図るという行為は適切な対人スキルに当てはまり，先行研究を踏まえると孤独感の低い者の行動特徴であると推察される。コロナ禍における間接的な他者との交流とは，感染拡大防止の観点から対面での面会を避け，携帯や PC 等を利用してコミュニケーションを図ることであり，具体的にはメールや電話，ビデオ会議等での会話が挙げられよう。一方で直接的な他者との交流とは，「外出自粛要請」等の制限があるなかで積極的に人込みに出かけたり，対面での他者との接触を試みようと外出することであると仮定できる。したがって，他者との交流を図るための行動特徴は二種類に分類され，孤独感の程度によって行動のパターンが異なることが推察される。コロナ禍で孤独を感じる者の行動パターンについて示唆を得ることは，これまで明らかにされることがなかった新たな日常生活にお

ける対人行動のメカニズムを明らかにし，孤独感の軽減や不適切な行動特徴の低減について一助を担うと言える。以上の点から，本研究の仮説を以下に示す。

2 仮説

仮説 1「交流のための行動特徴として，間接的あるいは直接的な対人接触行動が生じる」

対人接触を試みる際に，コロナ禍において適切であると推定される間接的な方法で交流を図る者と，無秩序な直接的方法で交流を図る者に分類されると仮定し，その行動特徴を検証する。

仮説 2「孤独感の低い者は統制のとれた間接的行動をとり，孤独感の高い者は統制がとれていない直接的行動をとる」

間接的行動と直接的行動の差異が孤独感の強さによって異なると仮定し，孤独感の程度によって行動の特徴が左右されていることを検証する。

3 方法

目的に沿って，20 代以上の男女を対象に質問紙調査を行った。以下に調査手続き，調査対象者，質問紙の構成を説明する。

3-1 調査手続き

新型コロナウイルス感染症の影響により，大勢の調査対象者を特定の場所に召集し質問紙を配布する集合調査が困難であると考え，インターネットのアンケートフォームを利用したクローズド型調査を実施した。複数のリサーチ会社においてアンケート機能や保有パネルの特徴，見積等を比較し，下記のアンケートサイトにて調査を進める運びとなった。アンケートサイトへの登録費用及びパネルへのアンケート配布依頼料は，研究責任者の研究費並びに研究実施者で負担した。

利用サイト：株式会社マクロミル「Questant」
調査パネル：GMO リサーチ JAPAN CLOUD PANEL
調査時期：2020 年 8 月大学院生数名を対象とした予備調査
：2020 年 10 月 本調査

尚，調査にあたり，本研究が個人情報の保護に配慮している調査研究であることを第三者的立場から認めてもらうため，並びに質問紙調査の内容が回答者の心理的負担となる可能性があること等を考慮し，本学の「ヒトを対象とした実験研究に関する倫理審査委員会」への申請を行い承認を得た。同様にリサーチ会社によるアンケート内容の審査においても認可されたことを確認し，配信を行った。アンケート冒頭には調査結果の取り扱いや倫理的配慮について記載し，説明合意を得ている。筆者によって「Questant」から調査パネルにアンケートが配布された後，3 日程度で回収された。回答者には，報酬として GMO リサーチからポイントが付与されている。

3-2 調査対象者

リサーチ会社が所有するパネル登録者のうち 10 代～70 代の男女 300 人程度に作成したアンケートを配布し，趣旨や目的に同意を得られた場合に回答に進んでもらった。全回答者 339 名のうち，明らかな虚偽回答を含むと判断された回答者を除き，最終的に 337 名が有効回答者となった。

尚，パネル登録者についてはリサーチ会社の利用規約（https://web.questant.jp/term.html），プライバシーポリシー（https://web.questant.jp/privacy.html）及びセキュリティ（https://help.questant.jp/hc/ja/articles/201613556）に基づき，倫理的配慮並びに個人情報の保護に十分に配慮するものとした。

3-3 質問紙の構成

1. フェイスシート

基礎項目として，回答者の性別，年齢，職業，居住形態，同居者の人数，生活圏を設定した。

2. 孤独感の測定

コロナ禍の時期における孤独感について，筆者が作成した質問項目を使用した。日本語版 UCLA 尺度（舛田・田高・臺,2012）及びストレス反応尺度（鈴木・片柳・嶋田・右馬埜・三浦・坂野,1997）を参考に，コロナ禍でのできごとや気持ちに焦点を当てた 9 項目で構成される。時期をコロナ禍に限定するため，「最近およそ半年のできごとや気持ちにどれくらい当てはまりますか」という教示文を提示した。それぞれの項目について「全くあてはまらない」「ほとんどあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「かなりあてはまる」「よくあてはまる」の 7 件法で回答する形式とした。

3. 行動上の変化の測定

新型コロナウイルスの感染拡大を受けてどのような生活が行われているか，筆者が作成した質問項目を使用した。行動に関する 9 項目と連絡を取った人物に関する 3 項目で構成される。前者については時期をコロナ禍に限定するため，「最近およそ半年のあいだ，以下の行動をどれくらい行いましたか」という教示文を提示した。後者については，「最も頻繁に連絡を取った人物はどなたですか」という教示文のもと，「父，母，きょうだい，祖父母，親戚，友人，恋人，その他，誰とも連絡は取っていない」から当てはまるものひとつを選択する形式とし，その人物との親密性を「あなたが困ったときに相談できて，心を打ち明けることが出来る」「形式的で表面的な付き合いである（逆転項目）」の 2 項目で測定する。尚，親密性については谷・原田（2011）の親密性尺度における質問項目を引用した。それぞれの項目について「全くあてはまらない」「ほとんどあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「かなりあてはまる」「よくあてはまる」の 7 件法で回答する形式とした。

4. 自由記述

「そのほかの生活上および行動上の変化について，自由に記述してください」という教示文のもと，自記式の回答欄を設けた。

4 結果

4-1 孤独感と行動に関する質問項目の因子分析

孤独感に関する質問 9 項目について得点分布を確認したところ，全ての項目において大きな偏りは見られなかった。そこで，全 9 項目を分析対象として，潜在的変数を探るために主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は 4.606,1.129,.923,.859…というものであり，1 因子構造が妥当であると解釈した。再度主因子法，Promax 回転による因子分析を行ったところ，1 因子構造であることが説明された。得られた結果を表 1 に示す。

続いて行動に関する質問 9 項目について得点分布を確認したところ，いくつかの項目で分布の偏りが見られた。しかし，いずれもコロナ禍によって変容した人々の行動を測定するうえで問題ない項目であると解釈した。そこで，まずは全 9 項目を分析対象として，主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は 2.681,1.232,1.037,.859,.814…というものであり，3 因子構造が妥当であると解釈した。そこで，3 因子構造を仮定して再度主因子法，Promax 回転による因子分析を行ったところ，4 項目が十分な因子負荷量を示さなかった。これらの項目を除外し，2 因子構造を仮定して再度主因子法，Promax 回転による因子分析を行ったところ，全 5 項目が十分な因子負荷量を示した。Promax 回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表 2 に示す。第 1 因子は 3 項目で構成されており，電話やメールなど対面ではなく間接的に他者と連絡を取る内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで第 1 因子を「間接的行動」因子と命名した。第 2 因子は 2 項目で構成されており，人混みに出かけたり家族や友人に会いに行ったりと直接的に他者と接触する内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで第 2 因子を「直接的行動」因子と命名した。尚，表 2 においては間接的行動因子をⅠ，直接的行動因子をⅡと表記する。

Table 1　Questionnaire on loneliness

	共通性
1.日常生活において、他者と接する機会が減少した	0.276
2.日常生活において、他者との交流を求めていた	0.223
3.ひとりぼっちのような感じがした	0.846
4.世間から孤立していると感じた	0.841
5.気持ちが沈んでいた	0.764
6.なんとなく不安だった	0.606
7.いらいらした	0.595
8.気力が出ない感じがした	0.671
9.そのうち何とかなるだろうと思った＊	0.147

＊逆転項目

Table 2　Results of factor analysis of the questionnaire on behavior (Factor pattern after promax rotation)

	Ⅰ	Ⅱ
1.SNSやメールで誰かと連絡をとった	0.877	-0.024
2.電話で誰かと連絡をとった	0.737	-0.042
3.オンライン会議やビデオ通話でだれかと連絡をとった	0.437	0.192
4.繁華街や観光地などに出かけた	-0.083	0.817
5.家族や友人、恋人に会いに行った	0.169	0.516

因子間相関　.335**（p<.001）

4-2 信頼性の検討

孤独感因子，間接的行動因子，直接的行動因子の合計得点を算出し，信頼性を確認するため，クロンバックの α 係数を算出した。孤独感因子は α = .86

であり，高い信頼性を示した。また間接的行動因子は $\alpha=.73$，直接的行動因子は $\alpha=.61$ であり，やや低い値を示した。しかし，著しく低い値ではないこと及び項目数などを考慮し，信頼性ありと解釈し以降の分析に採用した。

4-3 孤独感及び行動とフェイスシートの関連

まず，性差を検討するために孤独感因子，間接的行動因子，直接的行動因子を t 検定にかけた。その結果，全ての因子と有意な差は見られなかった。続いて，職業，居住形態，生活圏での差を検討するために各因子を一元配置分散分析にかけた。その結果，孤独感因子と居住形態が 1%水準で有意な差が示された。そこで多重比較を行ったところ，一人暮らし群と家族や親族と同居群との間で 5%水準の有意差が示され，平均値は一人暮らし群が有意に高かった。

間接的行動因子とはいずれの項目も有意な差を示さなかった。直接的行動因子とは，職業において1%水準の有意差が示されたため，多重比較を行った。その結果，会社員と専業主ふは 5%水準で，会社員と無職は 1%水準で有意差が示され，平均値はいずれも会社員が有意に高かった。

続いて連絡を取った人物及びその人物との親密性によって孤独感に差が生じるかを検討するために，一元配置分散分析と二元配置分散分析を行った。その結果，誰と連絡を取ったか，またはその人物との親密性の程度，さらに両変数の組み合わせの全てにおいて有意な差が見られなかった。

4-4 孤独感と行動の関連

孤独感因子と間接的行動因子及び直接的行動因子の関連を検討するため，それぞれの相関係数を算出した。得られた結果を表 3 に示す。まず，孤独感因子と間接的行動因子は有意水準 1%で低い正の相関が認められた。また，間接的行動因子と直接的行動因子で有意水準 1%で低い正の相関が認められた。孤独感因子と直接的行動因子は有意な相関を示さなかった。

そこで，孤独感因子から間接的行動因子への影響を検討するために孤独感因子を独立変数，間接的行動因子を従属変数として単回帰分析を行った。その結果，$R^2=.056$，$\beta=.238$ で有意水準 0.1%の有意な係数が認められた。続いて間接的行動因子を独立変数，直接的行動因子を従属変数として単回帰分析を行ったところ，$R^2=.112$，$\beta=.335$ で有意水準 0.1%の有意な係数が認められた。

Table 3 Correlation coefficients for factors for loneliness, indirect behaviors, and direct behaviors

	1	2	3
1 孤独感		.238**	
2 間接的行動	(337)		.335**
3 直接的行動	(337)	(337)	

注：右上は相関係数、左下は有効標本数を示す。**$p<.01$

5 考察

5-1 フェイスシート項目について

t 検定の結果から，孤独感，間接的行動及び直接的行動においては男女差が見られなかった。続いて居住形態差について，一元配置分散分析の結果から一人暮らし群は家族や親族群と同居群に比べ孤独を感じる傾向が高いことが示された。尚，間接的行動因子や直接的行動因子とは有意差が見られなかったことから，一人暮らし群が他者と連絡を取ったり直接的な対人接触の機会を得たとしても，家族や親族と同居群に比べ孤独を感じる傾向が低くなるわけではないと言える。

続いて職業差については，会社員が専業主ふ及び無職に比べて直接的行動をとる傾向が高かった。専業主ふ及び無職群は会社員に比べ社会的繋がりや他者との関わりが希薄になりやすい群であると言える。しかし，会社員群のほうが直接的行動をとる傾向が高いことから，必ずしも社会的孤立や孤独感の強さが「他者との直接的な接触」を引き起こすわけではないことが推察される。尚，孤独感と行動特徴の関連性については後述する。

さらに連絡を取った人物が誰であるか，またその人物との親密性の程度において孤独感因子と有意差が見られなかったことから，コロナ禍において調査対象者が抱いている孤独感は「他者と連絡を取り合うかどうか」や「どのような関係性の他者と連絡を取り合うか」という観点のみを重視しても解消されない可能性がある。孤独感の低減，解消にあたっては，先行研究において概念化されている孤独感とコロナ禍で生じている孤独感の違いや定義を明確にし，再度検討する必要があろう。

5-2 仮説 1 について

因子分析の結果から，コロナ禍での行動特徴とし

て，対面での交流を避け電話やメールを使用した他者との間接的な接触，外出等による直接的な接触の二種類が示された。したがって「交流のための行動特徴として，間接的あるいは直接的な対人接触行動が生じる」という仮説は支持された。

対人接触が制限されるなか，電話やメールを通しての間接的な交流は，繁華街への外出や友人に会いに行くといった直接的な交流の形に比べ，孤独感を低減させるためのソフトな行動特徴である。しかし，2 因子における正の相関から，ソフトな対人交流の形をとっていた者がハードな対人交流もとっていることが示唆されており，二つの行動特徴は独立した概念ではなく，後述の通り何らかの関連性があることが明らかとなった。

5-3 仮説 2 について

孤独感因子，間接的行動因子，直接的行動因子の相関及び回帰分析の結果から，孤独感が間接的行動と関連し，間接的行動が直接的行動と関連することが示された。さらに，孤独感と直接的行動には関連性が見られなかった。感染対策として他者との接触や人が密集した場所への不要不急の外出などが制限された 2020 年のコロナ禍において，間接的行動因子の項目は適切に統制された対人接触行動であり，直接的行動因子の項目は前者に比べると統制の低い過度な対人接触行動であると仮定できる。したがって，「孤独感の低い者は統制のとれた行動をとり，孤独感の高い者は統制がとれていない行動をとる」という仮説は支持されなかった。この結果は，コロナ禍で孤独を感じた者がとる行動の特徴が，孤独感の強さによって左右されているわけではないという新たな知見に繋がる。突如共通認識となった「他者との直接的な接触の制限」という社会的ルールのなかで，闇雲に大勢の人が密集する場所に出かけたり積極的に人込みに出向くという行動は，一見すると統制のとれていない無秩序的な行動であると言えよう。しかし，本研究の結果から，コロナ禍という非日常において単に強い孤独を抱えている者が統制のとれていない行動をとっているわけではないことが示された。孤独の強さが行動の在り方に影響を与えているわけではなく，寧ろ孤独を感じた者ほど統制のとれた間接的行動を行っており，そこから統制のとれていない直接的行動へと移行していた。つまり，寂しさを感じ，初めに電話やメールでのコミュニケーションをとるという間接的行動をとっていた者が，孤独感とは異なる別の要因によって直接的行動をとるという一連のプロセスが推察される。この別の要因として，アタッチメントスタイルの問題が関連している可能性がある。

Mikulincer & Shaver(2008)によると，アンビバレント型のアタッチメントスタイルを持つ者は危機的状況化でソフトな自己開示を行い，その際に満足する応答が得られなかった場合，自己開示の方略をより激しく過剰にすることが示されている。間接的行動によって心理的に満足できなかったアンビバレント型傾向の者が次の方略として直接的行動をとっていたと仮定すると，コロナ禍において問題視される不適切な対人接触行動は，孤独感の軽減では解消されない可能性がある。間接的行動の際に他者から得られた応答の内容は適切であったか，また応答に対する評価や捉え方が正常であったかなど，両者の相互作用によってその後の行動特徴が変化する可能性がある。

5-4 自由記述回答について

群分けの結果から，コロナ禍において多くの者が習慣上の変化を感じており，マスクの着用や消毒の徹底といった身近な行動が意識されていることが示された。

また t 検定の結果から，活動の範囲が制限され，外出を自粛し家で過ごす時間が増えたと回答した者は，そのように回答しなかった者に比べ孤独感を抱いていることが示された。また，外出を控えるという行動はコロナ禍において「統制のとれた適切な行動」であると推察するが，本研究のモデルに従った場合，ここで応答が得られなかった者は「統制のとれていない不適切な行動」に移行する可能性がある。適切な行動をとっている者が他者に何を求め，どのような応答を待っているか，他者への接触行動という観点に留まらず多次元的な視点で検討することが望まれる。

さらに，「仕事がなくなり収入が減った」など金銭的にマイナスの変化が生じた者は，そのように回答しなかった者に比べて孤独感を抱いていることが示されたが，金銭的問題により生じた孤独感が他者と連絡を取る，あるいは直接会いに行くなどの対人接触行動により解消されるとは限らない。孤独感が生じた背景を踏まえ，ケースに応じた適切な応答を行わなければ孤独感は解消されない可能性があろう。

6 今後の課題

本研究における問題点は以下の通りである。

まず，フェイスシート項目との関連について，「その他」群の割合が高い項目が見られたことから，適切な選択肢の分類ができていなかった可能性がある。さらに本研究にて使用したアンケートサイトは質問の項目数により依頼料が異なる仕組みであり，今回は費用の問題からその他群選択者に記述を依頼する項目が設けられなかった。したがって，フェイスシート項目の予備調査などを行い，適切な選択肢を検討する必要がある。

第二に，孤独感と対人接触行動に関する質問項目の信頼性，妥当性についてである。今回は質問項目の多さや調査形式が対面ではないことに加え，「コロナ禍での孤独感と行動の特徴」という危機的状況下に場面を限定したことから，既存の尺度ではなく自作の質問項目を使用した。因子分析を行いα係数を算出した結果から，本研究においては採用可能な質問項目であると判断したが，これらの項目をより良い信頼性，妥当性を示す新たな尺度として精査することでさらにエビデンスレベルの高い研究へと繋げることが出来る。したがって今後は「コロナ禍での孤独感と対人接触行動」に関する尺度の開発を行い，より再現性の高いデータを得ることが望まれる。

第三に，本研究においては対象者の平均年齢が比較的高く，特に学生群のサンプル数は少なかった。登録者パネルの特徴を考慮した場合，今回利用したサイトに限らずリサーチサイトの登録者の平均年齢はやや高くなると推測する。したがって，今後はパネルに依頼するインターネット調査と学生群などへの集合型質問紙調査を併用するなどにより，さらに偏りの少ないサンプルを用いてデータを解析する必要性があろう。

7 参考文献

・相川・佐藤正二・佐藤容子・高山 1993　孤独感の高い大学生の対人行動に関する研究－孤独感と社会的スキルとの関係―　社会心理学研究 8(1),44-55

・Jones, W. H., Hobbs, S. A., & Hockenbury, D. 1982 Loneliness and social skill deficits. Journal of Personality and Social Psycology, 42, 682-689.

・ジョーンズ, W, H. 松井豊 (訳) 1988 孤独感と社会的行動　ペプロー, L. A. & パールマン, D. 編　加藤義明 (監訳) 孤独感の心理学　誠信書房

・舛田・田高・臺 2012　高齢者における日本語版 UCLA 孤独感尺度（第 3 版）の開発とその信頼性・妥当性の検討　日本地域看護学会詩, 15(1) 25-32

・Mikulincwe, M., & Shaver, P. R. 2008 Adule attachment and effect regulation In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds,), Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications 503-531

・Peplau L. A., &Perlman, D. 1979 Blueprint for a social psychological theory of loneliness. In M. Cook & G. Wilson (Eds.), Love and attraction. Oxford, England: Pergamon.

・Solano, C. H., Batten, P. G., & Parish, E. A. 1982 Loneliness and patterns of selfdisclosure. Journal of Personality and Socta1 Psychology, 43, 524-531.

・鈴木・片柳・嶋田・右馬埜・三浦・坂野(1997) 新しい心理的ストレス反応尺度(SRS-18)の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究 4(1), 22-29

・谷・原田 2011　新たな親密性尺度の作成　神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要　5(1) 1-7

・諸井 1989　大学生における孤独感と対処方略　実験社会心理学研究 29 (2), 141-151

指導教員：家政学研究科児童学専攻岡本吉生教授